

現場から

ことばの「表情」を実感させるために

中 里 有 希

憧れの教壇に立ち始めてから半年が過ぎた。緊張もほぐれ、最近は生徒とのやりとりを楽しむゆとりが出てきた。しかし、授業は苦勞の連続である。毎時間、教科書とノートを持つているかを点検し、それらを聞かせるところから始める。やっと準備ができたと思っても、生徒の集中力は長くは続かない。おしゃべりに夢中になるか、ぼんやりとしているかである。

生徒の集中力のなさにも驚いたが、それ以上に驚くことがあった。三年の現代文で畑村洋太郎「失敗に学ぶ」(『新編現代文』明治書院)を扱ったときのことである。最後の時間に、文章を読んで失敗に対する考えはどのように変わったかを書いてもらった。

その中で気になったのは、「特になし」「意見という意見は何もない」「べつにない」というものである。何も感じることはないとはどういうことなのかと、一人ひとりにコメントを書いていた私の手は、そこで止まってしまった。これらのことばには、表情がないように感じられた。書かれていることばを受け止め、それに対する自分の考えを書くことは苦手なようだ。

しかし、よく考えてみると、ほとんどの生徒は毎日書きことばに接していると思う。それは携帯メールである。もつとことばに敏感であつてもよいはずだが、ことばに対する反応がないのは、絵文字や顔文字の影響だと考えられる。これらはことばに添えるだけで、簡単に表情づけができるので便利である。だが、それらはもともと内蔵された中から選ばれたものでしかない。伝えたいことばには、限られた絵文字や顔文字では表しきれないほどの意味があるだろう。絵文字や顔文字を使うことが習慣となったことで、ことばそのものが持つ表情の重要性を忘れてしまっているのではないかと思う。

そこで私は、ことばの「表情」をつかみ、ことばに「表情」をつけることを実感させるため、授業に二つの書く作業を取り入れた。一つは、発問に対して個人で考える時間を設け、自分の考えをノートに書くことである。口頭で答えてもらえばたった数秒で済むことではあるが、書けば全員がことばと向き合える。もう一つは、学習記録表「現代文のあしあと」を用いて、授業の自己評価をするともに、「今日の一言」欄で最も伝えたいことを書くことである。一学期は「普通」「がんばった」「わかった」が多かったが、二学期になってから「会話の一つ一つが深い」「表現が違ふと笑い声の印象が変わるから不思議」等、授業の内容に触れたものが多くなってきた。少しではあるが、変化が見られる。

知識としてのことばの力も必要だが、ことばを活用するための力が必要だと考える。まだこの取り組みも始めたばかりである。継続させながら、新たな工夫を考えていきたい。

(東京都立練馬高校)

「私」の「こころ」チャート

上 牧 瀬 香

国語教科書に残すか否かの問題はさておき、いったん授業教材として採用した場合、「こころ」が扱いにくい教材であることは間違いない。なんといつても長すぎる。この分量を、ただでさえ「ソウセキ」を読まされることにげんなりしている高校生たちにとりやって読ませるか―それが現場での課題の第一になつてくる。彼らのモチベーションを高め、楽しんであの分量を読ませるにはどうしたらよいか、頭を抱えていた折。TVのクイズ番組で、数人の中からウソつきを当てるヒントとして、心拍数グラフを開示して回答の参考にあせる趣向のものがあつた。取り繕った表面と、ビクビクの内心とのギャップが面白い。それで思いついたのが、「私」の「こころ」チャート。作成の課題である。

場面の流れにそつて段落を横軸にとる。テーマと縦軸の設定は自由。なるべく本文中の表現を根拠に、推測をまじえながら「私」(先生)の「こころ」模様をあらわすグラフを作成する。

オーソドックスに、「私」の心拍数を想定し「ドキドキ度」グラフを作った生徒は、一様に「K」の告白・死を山の頂点として、

みんな同じような波形になる。なかには、プロポーズの場面より「K」に対峙する場面のほうの心拍数を高く設定したり、「呼吸をする弾力性さえ失われた」という表現に注目し、そこを心肺停止状態としたりするような、鋭い読みも見られる。「お嬢さん」への「LOVE度」チャートでは、プロポーズ成功後、急速に数値が下がるのが印象的。「見る」・「見られる」という視線の交換に着目した二段構成のチャートなどは、そのまま論文になりそうな完成度の高さである。「私」の「K」への駆け引きを「戦い」とみなし、ゲームのように場面ごとの「ヒットポイント」を数値化したチャートを作る生徒も多い。ユニークなところでは、「私」の不安や心配を如実に映す「熟睡度」や「飯の美味しさ度」チャート、「K」という隣室の他者の存在を気にかける度合いを示す「襖の重たさ度」チャートなど。「こころ」という小説では、こんなにも多様なモチーフが「私」の揺れる心理の描写を裏付けているのか、と生徒によつて改めて気付かされ、感心させられることしきりである。

授業のねらいは、文学表現 という本来数値化できないはずのものを数値化させること。この作業のための思考は、小説を読むこと。そのものである、と言つて過言ではない。秀作をプリントでいくつか公開し、相互批評させたり、複数のチャートを参照して考察させたりする発展学習も、実り多いものとなる。

分量の多さとストーリーの複雑さという教材としての短所は、一工夫で類い希な強度をもつテキストとしての長所に切り替わり、高校生たちと文学テキストの読みの多様性を追求するための、恰

「同世代の目」

大橋 健 二

愛知県の高校教員となつて今年で19年目を迎え、赴任校も3校目となった。「これだ」という授業はまだまだできていないが、授業のあり方について、自分なりの実践をいくつか述べてみたい。私の授業スタイルの一つに「二人一組」というものがある。小学生のように隣の生徒と机を近づけて、学習活動を進めていくのである。ただ小学生と違う点は、1時間中ずつとはなく、時に応じて行う点である。

具体的には、新しい教材を読む時、二人一組で音読をしていく。一文毎や段落毎で交代をして、どんどん読んでいく。年度初めのまだクラス内での人間関係が不安定な時期は、「北側が第1段落、南側が……」「誕生日が早い者から」などとこちらから指示を出す。「北はどっちだったっけ。」「えっ、5月生まれなの。」などと言いながら、隣のクラスから苦情が来るのではないかという音で読み進めていく。少々読めない語句があつても、とばして読んでいく。

次に、「初読の感想」(3行)・コメント(1行)・まとめ(5

行)を行う。それぞれの行数は徐々に増やしていくが、基本的には3・1・5行である。感想は率直に書く。「よく分からなかった。」は最高の感想である。ただ、3行を埋めるには、まだまだ字数が足りない。分からなかった箇所、理由を考える。隣同士が書いたらノートを交換し、友人の感想に対して自分のコメントを書く。当然、記名もする。責任をもつて簡潔に記す。「私も分からなかった。」素晴らしいコメント。ここから全てが始まる。

最後に、自分の元に戻ってきたノートを見て、自らの感想と友人のコメントをまとめてみる。分からなかったのは自分だけではないという安心感からか、ペンは走る。筆者は何が言いたいのか。どこがどう分からないのか。ここから何を学ぶべきなのか。いろいろな疑問や思いを身近な友人と共有することが、今後の授業の取り組み姿勢を決定づけていくのではないだろうか。

高校生が、小学生のように文字通り「肩を並べて」学ぶ姿を幼く感じる向きもあるが、彼らの「世間」を利用しない手はない。彼らは、教員からの評価以上に、同世代からの評価を非常に気にしている。隣人は、時間が経つうちにクラスメイトになってゆく存在だが、それまでは得体の知れないストレンジャーなのである。教員が知識を与えていく授業スタイルは王道である。しかし、生徒自らに学習する主体であるという自覚がなければ、馬の耳に念仏である。授業を「受業」と書く生徒を、単なる書き間違いと笑つて済ませてはいけけないのではないだろうか。

(愛知県立瑞陵高等学校)

古文奮闘

——学習者の意欲喚起をめぐつて——

佐藤 厚子

今年度受け持っている「古典講読」(二単位、二学年全6クラス151名)の一学期の成績で、欠点者40名を出してしまつた。私の教師生活20余年の内、新記録となつた。

取り上げた教材は「かぐや姫の生ひたち」や「高名の本登り」などいづれも初歩的なものであつたが、中間・期末テストの平均点は30点代という不振ぶり。(但し、進学希望のークラスは除く。)欠点者を救うために課した、ノートの内容を書き写すだけのレポートも、提出したのは対象生徒の半分であつた。

現任校は開校36年目の公立の普通科高校で、学力は市販されている『高校受験案内』に拠れば、県内の最下層にランクされている、所謂教育困難校である。生徒指導上の問題が屢々起こるが、一番問題だと感じるのは、約半数の生徒が何事に対しても意欲が極めて低いということだ。特に、やりたくないものは避けるという傾向が強い。勉強はその最たるもので、テスト勉強などはほとんどしない。

二学期はこの状況を少しでも改善し、授業に参加させようと、

いくつかの工夫を試みた。

まず、学習法を一学期当初に行つていたプリント学習に戻した。解答を限定するような穴埋め式のプリント学習について、私は否定的な立場を採つてきたが、生徒の実情を考えると適しているのではないかと考え直したからである。目指したのは「授業の流れがわかる」、「誰でも答えられる」プリント作りである。本校の生徒は一度聞いただけでは、授業の内容を理解することが難しい。

また、欠席する生徒も多いため、授業で何をやったのか、後で復習できるようにすることが肝心であると考えた。プリントは、授業でやったことをその場ですぐに確認するのに用いた。既に板書してあることについて問う設問が多いので、答えやすかつたようだ。「わからない」という回答は次第に無くなつていった。

次に、教材であるが、二学期に入つて中間テストまでの一ヶ月半の間に文化祭・修学旅行と大きな行事が立て続けにあり、授業が小間切れになつてしまつたため、一時間ごとに完結できるものをもと考えた末、「古今和歌集」を選んだ。「古今和歌集」の四つの部立て(恋)「離別」「春」「秋」から各々三首を選び、部立てごとにプリントをまとめた。生徒には、三首の和歌を学んだ後に共通しているテーマ(部立て)を見つけ出させた。これには興味を持った者も現れ、毎回プリントの最後になるとこちらが質問してないうちに、「えっとー、この三つの歌は「花」の歌かな?あつ、「春」の歌だ。先生、「春」の歌でしょ?」などという声上がるようになった。学習の振り返りにもなつたと思われる。

学習内容は、各歌の「歌意」「語句の解釈」「鑑賞」をできるだけ

け簡潔に押さえた。歌によっては、参考として佐佐木幸綱氏の現代詩を載せた。^{※1}例えば「住の江の岸による波夜さへや夢の通ひ路人目よくらむ」は、佐佐木氏によって次のような詩に生まれ変わっている。

夢の中でもよい

あの方にお会いしたい　なのに

それなのに　住吉の岸に波寄る

夜さえも夢の中でさへ

人の目を気にして会ってくださらない

和歌を詩で鑑賞することによって、単に歌意を知るだけに止まらず、韻文に込められた心情というものが伝わったのではないかと思う。

十二首の歌を同じようなパターンで学習していったため、和歌の修辞については幾分か理解できたようだ。例えば、初めは混同していた「枕詞」と「掛詞」も、何度か目にするうちに違いがわかるようになってきた。「枕詞？あぁ、『たらちね』ね。」というように、一つの例を元に理解しているのが特徴である。とにかく、こちらの発問に反応できるようになったのは、大きな進歩といえるだろう。

行事に追われ、あつという間に中間テストを迎えた。果たしてその平均点は……50・3点であった。まだまだ学習に対する姿勢に問題はあるものの、点数という目に見える形で向上が認められたことは嬉しいことであり、励みにもなる。

今回の試みで感じたのは、くり返し学習することの大切さであ

る。プリントを使って確認や復習をしたり、和歌の学習を重ねて古語や修辞に馴れたりすることによって、理解の定着を図るところから学習に対する意欲も生まれてくるのではないだろうか。

中間テスト後に、既習の十二首の歌から一番好きなものを選んでそれを詩にするという表現学習を行ったが、彼らには難しかったようである。「詩って何？作ったことないから、わからない。」「五・七・五で作るの？」等の答えが返ってきた。佐佐木氏の詩を例に、自由に作って良い旨を伝えたが、「歌意」を書く者が多かった。一つの学習を行うにはレディネスが必要であることを、また反省させられたところである。丁寧な学習を心がけたいと思っている。

(埼玉県立吉川高等学校)

※1 佐佐木幸綱著『口語詩で味わう百人一首』

さ・え・ら書房 2003年12月発行

雑感

丹 田 充

北鎌倉の小高い丘の上に立つ本学園は、授業中窓の外の梢にリ
スの姿を見かけることも珍しくないほど豊かな自然に囲まれてお
り、中高合わせて約八百人の生徒が集う私立の女子校である。学
園の一日は十分間の朝の読書から始まる。

先日授業中に、高校生百二十人ほどを対象とした読書に関する
アンケートを行った。現在、朝の読書の時間に読んでいる本、好
きな本のジャンル、今まで感銘を受けた本などについて質問した。
生徒達が今読んでいる本、そして好きなジャンルとしてあげた
のは、九割が小説、一割がエッセイ、その他が一割であった。感
銘を受けた本としてあげていたものも評論は僅かで、ほとんどが
小説であった。「坊っちゃん」「人間失格」「星の王子さま」「恋
空」「バットリー」など実に多彩な作品があげられた。テレビド
ラマや映画の原作になっているものも目立っていた。

この結果だけから早計に何かを結論づけるつもりは毛頭ないが、
授業での様子や模擬試験の結果を見ても、生徒達は評論文の読解
を苦手とする傾向があり、もう少し評論に親しんだらどうかなど

と考えたりもするが、朝っぱらから難解な文章と向き合うのは、
私自身でも抵抗がある。また、若者達に対する「活字離れ」「国
語力の低下」という指摘が果たして妥当なものなのか、私には分
からない。ただ、生徒達は柔軟で瑞々しい「ことば」の感性を
様々な場面で発露し、こちらが驚かされることは多い。

ここで、高校一年生が夏休み明けに作った短歌を紹介したい。
「イマドキの若者」のこれらの作品から、私は何かなつかしいも
のと、「ことば」で刻まれた彼女達の「今」を確かに受け止めた。

嬉しさを上手く言えずに時進む淋しさの味はろ苦かった
暑い夏私をさそう高カロリーダイエツト中でも明日から
部活動ボール追いかけて涙して涙した分大きくなった
いと悲しき厭世感に懊悩し良きは何かと我呷吟す
視界のすみセミになれないヌケガラが

それでも空は知らないふりで
のしかかるセミの声やら暑さやら

日陰を求めて揺れるブリーツ
パソコンに写真をすべて移し終え

メモリ削除にしばしためらう
「宇宙一日本が好きだ」と云ってみる

日本の外に出ぬ夏休み
生徒達の、「ことば」による自己表現の可能性を信じつつ、そ
れを奪うことのないようにと考える今日この頃である。

(北鎌倉女子学園)